

「桃は、龍頭が滝の名物だったらしい（後編）」

前回までのところで、江戸、明治の文献に、龍頭が滝と桃についての記載があることを、紹介しました。今回は、大正、昭和編です。調べてみると、大正時代に発行された、3冊の文献の中に、記事を見つけることができました。

1冊目は、大正7(1918)年に、飯石郡役所が発行した、『飯石郡誌』です。この地誌書には、飯石郡の地理、歴史、行政、産業、交通、生活などが記されています。残りの2冊は、大正2(1913)年と6(1917)年に、島根県農会が発行した『島根県市町村別産物誌』です。これは、島根県農会が、県下の各市町村において、千円以上の産額を有する産物の種類を、「町村農会技術員」に調査・報告させ、市町村別に、その結果をまとめた報告書です。松笠村の農会技術員も、現地調査をし、その結果を報告したのでしょうから、この物産誌に書かれていることは、当時の松笠村の、農林産物などの生産状況を、正確に伝えているものと思われます。

ここで、話はそれますが、「郡役所」ですが、現代では、「郡」というのは、ある一定の区域を表す名称です。たとえば、合併以前は、飯石郡掛合町・吉田村、大原郡大東町・加茂町、仁多郡仁多町・横田町というように使われていました。しかし、明治、大正時代では、「郡」とは、「県」「町」「村」と同じように、行政区域を表すものであり、そこには、行政を担当する役所がありました（これが「郡役所」です）。飯石郡にも、飯石郡役所が掛合村に置かれ、島根県庁の統治下のもと、松笠村をはじめとする飯石郡に属する村の、指導監督にあたっていました。要は、県庁と村役場との、中間にある役所です。大正15(1916)年7月、郡役所は廃止されました。

「農会」というのは、戦前にあった、農業の改良・発達と、農業関係者の福利増進を図ることを目的とした、農業団体のことです。この団体は、市町村農会、郡農会、府県農会、さらに中央団体である帝国農会があり、整然と系統化、組織化されていました。松笠村農会も、上部の方針のもと、技術指導、生活改善指導、農林産物の共同販売、品評会、表彰などを実施していました。

さて、桃については、『飯石郡誌』では「泉源地方に一村落ありて桃花多し」とあり、明治時代の地誌書と、内容的には変わりありません。一方、『島根県市町村別産物誌』には、「産額少ナキモ特ニ著名ナル産物 桃」とあり、松笠村の桃は、産額は少ないものの、「著名ナル産物」だったことがわかります。もしかすると、龍頭が滝の桃は、「出雲名物」であったことを知る人が、大正時代には、松笠村には、まだ、ご存命だったのかも知れませんね。

しかし、昭和に作成された書籍や新聞を、できる限り調べてみたのですが、龍頭が滝と桃について書かれたものを発見することは、できませんでした。松笠村では、明治時代には、桃の木は、多くはなかったようです。その後、その数はもっと少なくなり、少なくなれば、話題にされることもなくなり、出雲名物とされた「龍頭が滝の桃」のことは、昭和に入ると、人々の記憶から完全に消えていった、と考えるのが適当ではないのかな、と思われます。



現在は、夏には、ムクゲが、龍頭が滝の観光客を迎えてくれています（2025.7.12 撮影）。